

風神の門

司馬遼太郎



新潮文庫

ふう じん の もん
風 神 の 門



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草152 B

昭和四十四年三月二十日 発行
昭和五十一年一月三十日 十三刷

著 者 司馬 遼太郎

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊖ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Ryōtarō Shiba 1969 Printed in Japan

新潮文庫

風 神 の 門

司馬遼太郎著

新潮社版

1879

風
神
の
門

八瀬ノ里

京から八瀬までは、三里ある。高野川をさかのぼって、洛北氷室ノ里をすぎると、にわかには手に叡山の斜面がせまり、前に金毘羅山がそびえて、すでに山里の感がふかい。

木々のうら枯れた山あいの道を、馬を悠々とうたせて縫ってゆく武士があった。背が高く、手足がたくましい。

卯ノ花いろの地に銀糸をあしらった派手な、でなし羽織を着、呂鞆に金を蒔いた無反りの大小を腰に、一見、堂上の諸大夫か、諸侯の部屋住みの庶子といった風儀にみえた。

それにしては供まわりをもたない。それだけではなく、色白の顔に眼だけが異様にするどい点が、行きかう里人に、この武士の素姓の見当をつけかねさせていた。慶長十七年十二月のことだ。

「孫八」

と、馬上の武士が、手綱をもつ下人によびかけた。四十がらみの下人も、ただの様子の子の男ではない。おそろく煙硝で焼かれたものだろう、両まゆ毛と左眼がなかった。右眼をかすかにあげて、「なんでござる」といった。

「降りる」

「八瀬ノ里までは、もうすぐでござる。がまんして乗っておじゃれ」

「足先きがござるわ。京とはなんと妙な所ではないか。氷室をすぎると、にわかには冷える」

武士は、馬からとびおり、ゆったりと歩きはじめた。

背後の西空に、冬の陽が、ひえびえと落ちはじめている。

「人通りが絶えたな」

「このさき、里人にも会うことはござるまい。道は、八瀬で行きどまりでござる」

「あと、十丁もなかるう。早う、八瀬のかまぶろとやらで疲れをほぐしたい。背すじが、ぞくぞくとござるようじゃ」

「霧隠との異名まである伊賀の服部才蔵どのも、意氣地が無うなられましたな」

「そのはずよ」

武士は自嘲して、

「いくら金になるとは申せ、堺のあきんど衆の手先きになっていては、身も心もなまるようじや。矢だまのなかで命をかけた昔がなつかしい」

「お若いのになにを申さるる。旦那さまのご出世はこれからでござるよ」

「出世？」

武士は、夕闇のなかで白い歯をみせた。

「サカイシ（堺仕）を百年つづけていても立身のたねになるものではない」

堺仕とは、伊賀の隠語である。堺商人のための、いわば商業諜報をする者の称で、慶長の初年以來天下に合戦のたねが付きたたため、伊賀盆地に住むいわゆる伊賀者たちの仕事がなくなり、堺の商人にやとわれる者が多くなった。この男も、そのサカイシのひとりである。かれらはおもに

京や江戸の新府に駐在して、天下の形勢を大小となく堺へ通報し、堺商人は、その情報によって思惑おもわくをしたりする。しかし、戦乱のなかに生きてきた伊賀郷士ごうしのあいだでは、この安穩すぎる仕事は、ほこりとはされなかった。

「たいまつ」

と、才藏は孫八に命じた。すでに、街道に日が暮れおちていた。人の世には、そういうことがある。このとき、たいまつさえつけなければ、かれらがたどった数奇な運命は、あるいは他の者を見舞ったかもしれない。

孫八が石をきってたいまつをつけたのは、三宅八幡宮みやけはちまんぐうの前であつた。ふと前面の叡山を見あげると、この夜中に雲母坂きんぼざかをのぼる僧でもいるのか、中腹に数点の火のうごくのがみえた。

服部才藏は、すでに歩きはじめている。路上は、暗い。

ともすれば足のおくれる孫八が、半丁ばかり先きの才藏の影へ声をかけようとしたとき、にわかに、殺氣を感じた。

(うっ)

身を沈めようとしたときは、すでにおそかった。

馬がさおだちになっていた。孫八は手綱を捨て、とっさの機転でたいまつを足もとの高野川へ投げると、数歩走って草に身を投げた。

馬は、槍傷やぶきでも受けたか、いななきながら崖がけをおちていった。

(何者か)

わからない。たいまつを目印しに襲われたことだけはたしかだ。

孫八は眼をあげて、才藏のいる方角をみた。剣の触れあう音がした。数人の足音が、入りみだれている。

(三人。……)

眼をつぶり、耳でかぞえた。この男が加勢にゆかないのは、主人の才藏の腕を信じきっているからだ。

孫八は、地を這って接近した。相手が何者であるかを見とどけたかったのだ。

そのとき、低いうめき声がきこえ、ひとつの影が、丸太をたおすような勢いで、地上へたおれた。

「ひけ。人ちがいだ」

そんな声がした。死体をのこして、他の二人が、路上を風のように西へさして駈け去った。ほとんど、一瞬のできごとだった。

「旦那さま」

孫八が立ちあがって、云った。

「お馬を損じましたわ」

「そうか」

才藏は、死体のそばにうずくまっている。

「不用心だが、もう一度火をつけてみるがよい。まさか、あの者どもは、その辺にはいまい」

孫八がたいまつを近づけると、才藏はすでに死者の刀の目釘をぬき、つかを捨て、銘をしらべていた。

「平田三河守厚種とある。あまりきこえぬ名だが、三河の草鍛冶であらう。さきのことばに三河

なまりがあつたが、いよいよ、この男、三河者と知れたな」

「徳川の」

「そうだ。家康の三河以来の郎従とみてよい。京にいる徳川家の者といえ、所司代の家来どもだろうか」

覆面をはずした顔は、むろん見おぼえがなく、衣紋に定紋がない。ふところには、汗くさい手拭ぬぐいが一本あるきりで、なにもなかった。

服部才藏は、袴はかまのほこりをはらって立ちあがった。

「どうなさる」

「死体は捨てておこう。人ちがいだったのだ。どうせ、われらにかかわりあいはない。……馬をひけ」

「それは、さきほど申しあげましたわい」

「なんと」

「損じた、と」

「そちは口が小うるさいわりには手がおそくできている。あの馬は金二枚であがなったものだぞ」

「才藏さま」

といった。

孫八は、あるじを旦那さまとよんだり、その名でよんだりする。伊賀の服部ノ庄にある才藏の屋敷に飼われてそだったこの男は、その屋敷の二男である才藏のうまれたときから知っている。

あるじというよりも、肉親の甥おいのように感じているのだろうか。

「馬一頭を損じたぐらいで、そのようにこわい顔をなさるのは、孫八は迷惑めいわくじゃな」

「不足か」

「サカイシ（堺仕）になってあきんどの手つたいをなされば、申さることまでが、吝しおうなった。以前は、そのようではなかったわ」

「こいつめ、おのれが損じておいて、おれにあてこするではないか」

才蔵は苦笑した。

闇のむこうに家の灯がみえた。右手の高野川は、川幅が急にせまくなり、瀬の音が、わくように高い。崖にかかっているのは、西塔橋であろうか。

「いよいよ、八瀬ノ里でござる」

孫八がいった。

この峡谷の里の名は、京や山城やましがまだひらけなかった古事記の時代から、その名が記録されている。里人を八瀬童子やせどうじといい、天皇の葬儀には、御柩ひつぎをかつぐ古習があった。

戸数はかぞえるほどしかない。

「訪ねる家は、たしか嘉兵衛茶屋と申したな」

「茶店へは飛脚にことづけておきましたゆえ、すでに支度をして待ちかねているでござろう」云うまもなく、茶屋の者が、たいまつをかがげて西塔橋のたもとまで出迎えにきていた。

「斎藤縫殿様ぬいでござりまするか」

「いかにも」

才蔵は、京における表むきの名を、肥後の阿蘇大宮司あそだいぐうじ家の家来斎藤縫殿ぬい頼仲たのむねということにして

ある。肥後ならば遠国でもあり、偽名が知れることは、まずあるまい。

嘉兵衛茶屋は、母屋おもやが溪流に面して建ち、ちかごろ建て増しした離れが四つ、崖のうえにならんでいる。

才蔵と孫八は、その西のはしの一屋に案内された。

「にぎわっているようだな」

といったのは、母屋の裏庭に乘馬二頭がつかないであつたからだ。それに、ここからはよくみえないが、東の離れ屋の軒端のきばにおいてあるのは女物の乗物らしい。

「いずれのかたが、お見えか」

「高貴のむきにござりまする」

「お名は」

「はばかられまする」

（とすれば、よほど尊貴な身分の女とみゆる。あの馬は、女の従者のものであろう）

内心、持ち前の好奇心がもたげてきたが、そのくせ表情だけはむっとりとした横顔をみせて、才蔵は床柱にもたれている。茶屋の者は、ぬぎすてた袴をたたんでいた。

ふと手をとめて、

「あの、これは血ではござりませぬか」

と、すそのしみを凝視した。

「血だ」

「げっ」

「魚の血だよ」

才藏の、笑顔がいい。顔を融けるように崩すと、たいていの者は、ひきこまれるような親しみをおぼえてしまう。その者も、笑顔をみて他愛もなく怖れが去ったらしく、
「安堵つかまつりました」と息をついた。

「ふろの支度はできておるか」

「いえ、まだでございます」

茶屋の者はいそいで立ちあがって、

「あとでお報らせ申しましょう」

と母屋のほうへ姿を消した。

八瀬の沐浴は、古来、特殊の法をもって諸国に知られている。

湯をもちいなかった。

炭焼がまに似た巨大な素焼がまを築き、周囲からたきぎをもってかまに火を加え、内部の空気が十分に熱したところで、浴客をかまの室内に入れるのである。

まず、ゆもじを着ねばならない。そのまま、室内のむしろの上に横たわるのである。むしろには塩が打たれ、アオキの葉が敷かれている。汗でゆもじが濡れはじめたころ、それをぬいで別室に移り、微温の湯のなかにひたるのだ。傷によく、疲れによく、疝氣によい。

京は近在に天然の湯をもたない。都の貴顕紳士が、冬のあいだ、八瀬にきて保養するのは、この諸国にめずらしい沐浴法があるためであった。土地が古いためにこの沐浴法にも伝説が多く、神武天皇の兄五瀬命が、ここで矢傷をいやしたという伝えもある。

「あない（案内）がおそいな」

と才蔵がいった。

「おそらく、先客のために母屋が混雑しているのでござろう。あないを待たずに参りましょう」
ふたりは、夜の庭に出た。

母屋のぬれ縁の下に、点々と庭燎^{にわび}がともされ、数人の雑仕^{ぞうし}がひかえている様子が、なんとなくみやびている。

「なるほど、よほど高貴な客に相違ない」

「乗物を見ると、姫御料人^{ぎよちうじん}のようでござるな。沐浴なされているあいだに、たしかめてみましょう」

才蔵は控えの間で衣服を解いて孫八に渡し、白いゆもじに着かえ、脇差を左手ににぎって、廊下を渡った。

かまは、二つならんでいる。

才蔵は、無造作にその一つの扉に手をかけて、なかに入ろうとしたとき、通りかかった少女が急にひざまずいて、手をあげ、

「あの」

といった。

「どうかしたか」

「そのおふろは、当家のしきたりとして、三位以上のかたがお用いになることになっておりまする」

さすがに、御所の用をつとめるこの里らしく、位階のけじめがやかましい。

「おれでは不足なのか」

「肥後阿蘇大宮司のご家来斎藤縫殿様ならば、七位におわしましょう」
縫殿とは、才藏の偽称である。

「別の方へお通りねがいまする」

「いや、折角きた。引きかえすのも大儀ゆえ、押していることにする」

扉をあけると、なかは、たたみを八畳ばかり敷いた広さになっており、すみに、一穗の灯明が、かすかに闇をはらっている。なかは、暗い。

横たわると、アオキの葉の重い臭気にまじって、ほのかに沈香のかおりがただよい、かおりのなかに、気のせいのか、女の肌の甘さがのこっている。才藏はふと眼をひらいて、

（あの客の肌であろうか）

その客の名が、わからない。

才藏は、熱気にみちた素焼の沐浴室のなかで、三宅八幡宮の前で遭った刺客のことを考えていた。

（たしかにあれば三河者だった）

わかっているのは、それだけである。

（逃ぐるとき、おれを、人ちがいだ、と叫んだ。おれのどこを見違えたか。たれを斬ろうとしたのだらう）

世上は、物騒になっている。

関ヶ原の合戦で覇をにぎった家康が、江戸に幕府をひらいたのは、慶長八年の二月のことであ

った。天下の諸侯は、こぞって江戸に屋敷をおき、徳川家に臣従した。

とはいえ、関ヶ原の一戦は、たんに豊臣家の一奉行石田三成を倒したにすぎず、太閤の遺児秀頼はなお大坂にあり、遺臣に擁され、無双の金城にまもられて日々成人しつつあった。

（内大臣秀頼はたしか、今年ではたちになる）

世間のうわさでは、故太閤恩顧の大名のうち、たとえば、加藤清正、福島正則といった者は、秀頼成人のあかつきには、江戸の覇権をふたたび大坂にうつす策謀を秘めているという。……才藏は指を折って、

（家康の年は七十三だ）

才藏ばかりではない。いまや、天下の興味は、秀頼と家康の年をかぞえることに集中しているのだ。

秀頼は、日々壮者になり、家康は、日々、老衰する。家康が死ねば、かれひとりの武略と人徳に服従している外様大名は、背をひるがえして大坂に臣従するだろう。そのとき、天下は二つに裂け、ふたたび東西の激突がおこなわれることは、自然のなりゆきだった。

（家康は、自分の死の近いのを知っている。あせってもいよう。存命中に豊臣家をつぶさなければ、徳川百年の計がたたぬ。とすれば、ことしあたり、あの老人はなにをしでかすかわからぬな）
そう見た。

が、大坂も、だまっていはいまい。

当然の工作をする。そうした東西の策謀は、京を中心におこなわれつつあるはずだった。

（そのあらわれか）

才藏の闇討ちのことである。むろん人ちがいではあろう。江戸方でも大坂方でもない伊賀の一